

移動式クレーンの構造規格が改正 石材業者はどんな点に注意すべきか

全国石材施工協会のミーティングに出席して

墓石などの石材の施工現場において、今や欠かせない存在となっている移動式クレーン。その移動式クレーンの構造規格が一部改正されることになった(厚生労働省告示第33号)。

これを受けて、一般社団法人全国石材施工協会では去る11月21日、移動式クレーンのメーカーである古河ユニック株式会社および株式会社前田製作所から各2名を招いたミーティングを行なった。本紙記者も同席した。

この改正が直接的に関わるのは移動式クレーンのメーカーであるが、機械のユーザーである石材業者・施工業者にも大きな影響を与えるものになる。従来の移動式クレーンでは、荷重計が「過負荷を防止するための装置」として認められていたが、改正後はそれが認められなくなった。荷重計以外の「過負荷を防止するための装置」として「定格荷重制限装置」もしくは「定格荷重指示装置」などを新たに備えなければならなくなったのである。

「定格荷重制限装置」は定格荷重を超えた場合に作動が停止する装置で、多くの現場も数多くあります。そうした現場ではアウトリガの張り出しが十分に行えないわけで、その場合に安全装置(モーメントリミッター)が働いてしまうと、移動式クレーンが使えない可能性が出てくるという懸念があります」と現場で施工する立場から各メーカーに問いを投げかけた。

移動式クレーンは来年3月以降の製造分より構造規格が変更されることとなった。写真左は前田製作所のかにクレーン、右は古河ユニック株のミニクローラークレーン



「かにクレーン」の1・72tなどですでにML標準装備を導入している古河ユニックでは、ML標準装備によって規格改正に適合した安全性を保ちながらも、従来の使い勝手の良さを追求した機械を生産していく姿勢である。ML対応機では安全性が高まるが、機能性(使い勝手)がどのよう

に制限されるのだろうか。施工業者にとってはその点が見えなくなる。どのようなML対応機が登場するのかは来年3月以降にならないと明らかにはならないが、センサーを高精度なものにすることで、従来の機に比べて高額になることは間違いないであろう。

「これから」
来年3月1日より前に製造ラインに乗っていたものであれば、従来機をそのまま使い続けることができる。そのための墓石などのアウトリガ張出式クレーンのほか、トラック搭載型クレーンも含まれる。今回の移動式クレーンの構造規格改正の背景にあるのは、移動式クレーンによる事故(特にトラック搭載型クレーンによる死亡事故)の多発であるようだ。

「施工現場の安全性の観点から考えれば、今回の移動式クレーンの規格改正は歓迎すべきことだと思いますし、今後ML対応機が普及していくことが望ましいと思います。若手人材の確保のためには、より安全に作業できる環境を作らなければなりません。その一方で、機械の価格上昇分のコストをどこで回収するのか新しい課題になります」と井比氏。



移動式クレーンメーカー2社より担当者を招いて開かれた全国石材施工協会のミーティングにて。全国石材施工協会・代表理事の井比安育氏(正面右)、同協会・事務局の渡邊博巳氏(正面左)のほか、古河ユニック株から吉野亮氏・西本悠太郎氏、前田製作所から小池憲義氏・北澤旬平氏が出席した。

「かにクレーン」の1・72tなどですでにML標準装備を導入している古河ユニックでは、ML標準装備によって規格改正に適合した安全性を保ちながらも、従来の使い勝手の良さを追求した機械を生産していく姿勢である。ML対応機では安全性が高まるが、機能性(使い勝手)がどのよう

に制限されるのだろうか。施工業者にとってはその点が見えなくなる。どのよう

移動式クレーンは来年3月以降の製造分より構造規格が変更されることとなった。写真左は前田製作所のかにクレーン、右は古河ユニック株のミニクローラークレーン

移動式クレーンの構造規格の一部改正に関わる主なポイント

- Q いつから?
- A 2019年3月1日製造分から適用
- Q 適用されるのは?
- A つり上げ荷重0.5t以上、3t未満の移動式クレーン
- Q 何が変わる?
- A 安全装置(ML)の標準装備が義務になる
- Q 安全装置(ML)の種類は?
- A 停止型と警報型がある
- Q 従来機は?
- A 来年3月以降もそのまま使える
- Q 従来機の補修部品は?
- A 生産終了から10年間は供給可能
- Q ML対応機による効果は?
- A 安全性が高まる
- Q ML対応機の価格は?
- A 従来機より高額になる可能性が高い
- Q ML対応機の種類は?
- A 機種が限定されていく可能性が高い

「かにクレーン」の1・72tなどですでにML標準装備を導入している古河ユニックでは、ML標準装備によって規格改正に適合した安全性を保ちながらも、従来の使い勝手の良さを追求した機械を生産していく姿勢である。ML対応機では安全性が高まるが、機能性(使い勝手)がどのよう